

裾野麗峰山の会山行報告書

文・諏訪部、写真・諏訪部、後藤、GPS・村山

山行番 NO. 1546
日時 2013.05.03 (金) 晴
山域 頸城山塊・頸城駒ヶ岳 (最高点=1487m)
コース 下土狩4:00—大神堂登山口9:30—バンド下11:30—頸城駒ヶ岳12:30~13:30—登山口15:30—ホワイトクリフ16:00 (泊)
標高差 上り・下り 登山口410m~頸城駒ヶ岳1487m=1077m
参加者 後藤隆徳(66)、村山忠彦、石和加代子、田内保子、諏訪部豊=5名

3日4:00に長泉の後藤さん宅を車で出発し、石和さん、村山さんをピックアップする。朝霧高原から中央道を走り、安曇野IC(旧豊科IC)で国道147号線に乗る。

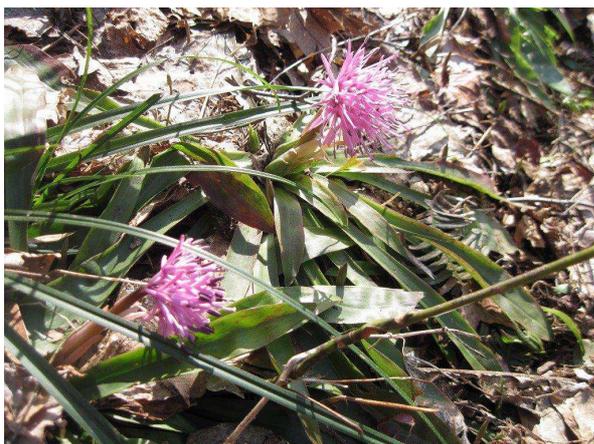
信濃大町からは国道148号線になり、仁科三湖を左に見てなおも北上する。根知で東進して頸城駒ヶ岳(くびきこまがたけ)の麓を目指す。やがて左手に頸城駒ヶ岳の異様な姿が見え出した。登山口は農道を少し走った所だった。出だしから雪が見えるのでロングスパッツを装着する。



9:30 登山開始。登山道には雪が残っているが雪が消えた部分にはショウジョウバ



カマ(猩々袴)やミスミソウ(三角草)が花を咲かせている。登山道は樹林帯の尾根道になり、残雪も増えてきたのでアイゼンを着ける。雪に隠れて判然としない道はやがて大岸壁の基部に導かれる。ほぼ垂直に切り立った岸壁はとて脆そうで、今にも雪解け水と一緒に落石がありそうだった。登山道はここから右上する明瞭なバンドをたどる。このバンドは、これがなければこ



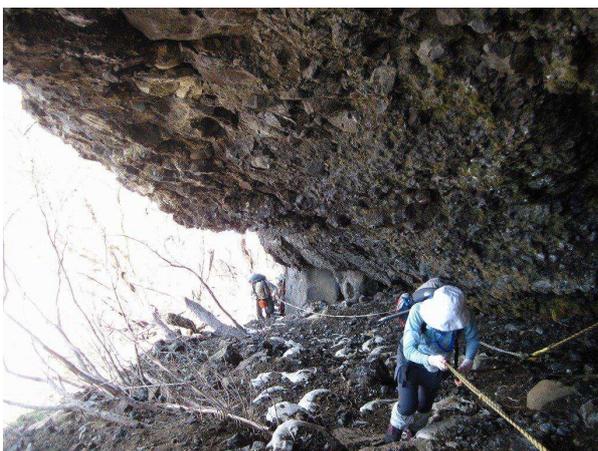


の山には登れないと思わせるような見事なものであり、部分的には左側がオーバーハングして屋根のようになっている。またバンド上部には沢が横切り、その水がこの岸壁を滝となって落ちている。この滝は真冬には氷結して100mの大氷柱となり「カネコロン」と呼ばれているようだ。

その沢を過ぎると間もなくバ



ンドは終わり、尾根に出る。下界の展望が一気に開け、川を挟んだ



ものがあつたがそれらが余りに似ていたので完全にそう思い込んでいた。しかし家に帰って調べたら何とあのスキー場は糸魚川シーサイドバレースキー場であり、ゆきだるま温泉と思い込んだ建物は我々がこの日泊まったホテルホワイトクリフだった。完全な方向音痴になっていたわけであり、また思い込みのこ

対岸に、雪が消えて芝生状になったスキー場が見えた。そのコースレイアウトが何度か行ったことのある上越市安塚にあるキューピットバレースキー場に似ていた。スキー場下にはこれも見覚えのあるゆきだるま温泉らしき建物が見えた。「こんなに近くだったのかなあ？」と位置的に釈然としない





わさを思い知る良い事例となった。



ところでここからは雪の豊富な樹林帯の登りとなり、やがて木がまばらになった辺りが山頂だった。山頂には小さな祠があるらしいが今は完全に雪の下だ。後藤さんの遊び心で持ってきた小さな鯉のぼりを手に今山行最初のピークである頸城駒ヶ岳記念撮影した。



下りは登ったルートを忠実にたどり、登山口まで戻った。宿は前述のホテルホワイトクリフだった。この宿はスキー場の真ん前にある典型的なスキー宿だが風呂は日帰り入浴もできる立派な温泉だ。「塩の道温泉」というナトリウム泉で肌がつるつるする。浴槽もまあまあ広くて良い風呂だっ



た。

夕食前に糸魚川労山のメンバーである加藤さんが差し入れをいっぱい持って宿を訪ねてきた。山スキーの名手であるという加藤さんとしばしの歓談をした。加藤さん、ありがとうございました。



誰も早朝からの行動でかなり疲れていた。後藤さんの「もう寝るぞ！」という号令の元、20:30には布団に入り、朝までぐっすり爆睡した。

以上



参考＝ 2013年は残雪が多く花が殆ど無かった。参考まで2007/5/4、2008/5/6の
写真を添付しました。



雨飾山

堇細辛 (スミレサイシン)



2008年5月6日
バンド下
殆ど雪はない



三角草



猩猩袴 (しょうじょうばかま)



越後雉筵 (えちごきじむしろ)



曙躑躅 (あけぼのつつじ)



稚児百合



岩鏡



白花碓草



雪椿

山荷葉 (さんかよう)



水芭蕉

三角草

延齡草

